

## 「オックスフォード運動」の意義

多 田 稔

20世紀もあと僅かな年月を残すだけになってきた近年、当然のことかもしれないが、西欧の19世紀世紀末文学がわが国の学会で注視されるようになった。更にそれを遡り、19世紀全体を見直そうとする19世紀研究が目下盛んに行なわれている。第2次大戦後、未曾有の経済発展をとげて今や世界一の外貨準備高を誇る日本の現状と、1850年と60年の僅か10年間に、その海外貿易額を一躍2倍にしたイギリス経済との間には、何か共通した要素が感じられなくもないのである。そして、そのイギリスの海外貿易額は60年以後は終始減ずるばかりで、一方、所得税率は1873年以降増加しはじめ、1876年を境にして、イギリスは貿易赤字国に転落していったのである。その経済繁栄の頂点にあったヴィクトリア朝は、マッシュュー・アーノルド（1822—88）の表現を借りると「懷疑と論争と狂気と不安に満ちた鉄の時代」であったわけなのだが、「鉄の時代」という部分を「エレクトロニクスの時代」と置き換えれば、この表現はそっくりそのまま現在の日本にも当てはまるのではないかと懸念されるのである。このヴィクトリア朝の幕あけの時点で、イギリスの思想・学問の中心であるオックスフォードで起った宗教改革運動が「オックスフォード運動」であった。そしてそれは単にヴィクトリア朝の発足時において起った運動であったばかりではなく、国家と宗教が一体となっている英国教会の中心地における多くの聖職者・学者たちをも巻き込んだ理想主義的色彩の極めて濃い宗教上の改革運動であったために、この運動の帰趨は各界の人士に多大の影響を与えたのであった。後年アメリカを訪問した前記のアーノルドは、エマスンに関する講演の冒頭で、

「オックスフォード運動」の意義

「オックスフォード運動」華やかなりし頃の聖マリア教会で行なわれていたジョン・ヘンリー・ニューマン（1801—90）の説教の魅力を次のように回顧している。

40年前は彼（ニューマン）の血気盛んな時であった。彼はオックスフォードのわれわれのすぐ身近にいた。日曜日毎に、彼は聖マリア教会の説教壇で説教をしていた。彼はわれわれにとってはこの世で最も国家的かつ自然な制度である英国教会を変容し刷新しようとしているかに思われた。聖マリア教会の午後の薄暗い明りの中の側廊を滑るように通り抜け、説教壇にすくっと現われ、人を恍惚とさせる声を響かせて、宗教音楽かとも聞きまごう妙なる甘味な詠嘆調の声が沈黙を破って聞えてくる、この世のものとも思われぬあの言葉や思想の主の魅力に、一体誰がさからうことができたであろう。（Discourses in America）

夙に16世紀に、トマス・モアの『ユートピア』において警鐘が鳴らされていたイギリス資本主義経済のひずみは、18世紀になるとますます大きくなり、新興産業都市には多くの貧しい労働者があふれてきたのであった。こうした人たちを対象にしたプロテスタントの信仰覚醒運動が、18世紀後半のウエスレー兄弟によるメソジスト運動であった。そしてこの運動の基底には、18世紀の理神論に対する反撥であった「心情の要請」の思いがこめられていたのである。優れた詩人であった弟のチャールズ・ウエスレー（1707—88）の作詩による6500以上の賛美歌がこの運動を具体的に盛り上げていたのである。この「心情の要請」を強調するという点では、「オックスフォード運動」も同一の路線に立っていた。

すでにロマン主義文芸運動はウォルター・スコット（1771—1832）、サミュエル・テイラー・コールリッジ（1772—1834）やウィリアム・ワーズワース

(1770—1850) においてその開花をみていた。しかしながらローマ・カトリックとプロテスタントとの中道 (Via Media) を標榜してきた英国教会の内部において、いわば体制内改革として始まったのがこの「オックスフォード運動」であり、その狙いは、ローマとは一線を画した上で、高教会に潜むカトリック的色彩を強く前面に押し出すことによってプロテスタンティズムを矯正することにあったのであるから、その立役者であったニューマンの望見した中世は、ロマン主義者たちの夢をかきたてた廃虚の殿堂ではなく、内面性の要求に裏打ちされ、権威をもった荘厳な神の座のイメージであったのである。それはまた、現在も英国教会の賛美歌として歌われているニューマンの有名な次の詩のもつ真剣さでもあった。

Lead, Kindly Light, amid the encircling gloom,

Lead Thou me on!

The night is dark, and I am far from home—

Lead Thou me on!

Keep Thou my feet; I do not ask to see

The distant scene,—one step enough for me.

I was not ever thus, nor pray'd that Thou

Shouldst lead me on.

I loved to choose and see my path, but now

Lead Thou me on!

I loved the garish day, and, spite of fears,

Pride ruled my will: remember not past years.

So long Thy power hath blest me, sure it still

Will lead me on,

O'er moor and fen, o'er crag and torrent, till

The night is gone;

And with the morn those angel faces smile

Which I have loved long since, and lost awhile.

June 16, 1833.

めぐみある光よ、とり囲む暗闇の中で導きたまえ、

われを導きたまえ。

夜は暗く、私は家から遠く離れております、

われを導きたまえ。

わが足もとを守りたまえ、私は遠くまで見えるようにとは申しません、

一歩だけで充分なのです。

私はこれまでこんな気持ちになったことはなく、また

われを導きたまえ、と祈ったこともありません。

私は自分の好きな道を勝手に進んできましたが、今はもう

われを導きたまえ。

私は虚飾の日を送るのが好きでした、そして恐れを抱きはしたものの

我意を通して得々としていました。過ぎにし年を忘れたまえ。

こんなにも長く、ありがたいことにあなたのお力添えを頂いてきました。

これからもきっとお導きいただけるものと思っています。

沢や沼、崖や急流を越えて、

闇が去ってしまうまで、

そして朝になって、ずっと前から私が愛してはいたが一時見失っていた

あの天使たちがにっこりと笑う顔がみえるようになるまで。

1833年 6月16日

この詩からも、「オックスフォード運動」を推し進めていった中心人物であったニューマンの、真執でいつわりのない正直な人柄が十分に汲みとれるのである。このニューマンは、1833年7月14日のジョン・キーブル(1792—1866)が巡回裁判説教で行った「国家的背教」(National Apostasy)、——世俗化した議会による信仰への干渉に対する抗議を内容としている——この説教が出版されたこの日をもって、「オックスフォード運動」の始まりとみていたのであるが、さて一体、この運動の始まったのは歴史的にみるとどういう時期だったのだろうか。

1789年のフランス革命以来、「自由主義思想」はイギリスにも強い影響を及ぼしていた。1824年には「結社禁止法」が廃止せられ、1828年には非国教徒が公職につくのを禁止していた「審査法」が撤廃された。1829年には「カトリック教徒解放令」が出され、1832年には大陸では7月革命が起り、イギリスでは「第一次選挙法改正」が行なわれ、この奔流は1838年以降にはげしくなっていった「チャーチスト運動」へと連動していったのである。つまり、非国教徒や工場労働者の勢力が拡大すると共に、英国教会の政治的母胎であるトーリー党の力がそれだけ弱まり、きびしい階級制度にひび割れが生じ、その結果、一種の社会不安が醸成された形になっていたのである。にもかかわらず、国教会の聖職者の多くは、手厚く保護された身分上、経済上の特権の上にあぐらをかいて惰眠をむさぼっていたのである。狩猟と魚釣りに時間をつぶし、葡萄酒の年代や銘柄にうつつを抜かす国教会の聖職者たちの姿は、ヴィクトリア朝の小説ではなおじみのものとなっている。こうした聖職者たちの良心と理性に対する警鐘が、1833年9月9日より連続して発刊されるに至った『時局に関する小冊子』に盛られたニューマン、キーブルのほか、H. フルード(1803—1836)、W. パーマー(1803—1885)、A. パーシヴァル(1799—1853)、H. ローズ(1795—1838)などによる論文であったのだ。面白いことに、そこに盛られた内容とは裏腹に、

「オックスフォード運動」の意義

その伝達的手段は、恰も福音主義者たちがとる手段のように、ちゃちな小冊子によっていた。一ペニーで売り出された4頁の小冊子第1号はニューマンの筆になるものであった。冒頭は次のように始まる。

No. 1.]

(*Ad Clerum.*)

[*Price 1d.*

THOUGHTS

ON

THE MINISTERIAL COMMISSION.

RESPECTFULLY ADDRESSED TO THE CLERGY.

---

I am but one of yourselves,—a Presbyter; and therefore I conceal my name, lest I should take too much on myself by speaking in my own person. Yet speak I must; for the times are very evil, yet no one speaks against them . . .

牧師職に関する考察

謹んで聖職諸子に寄す

私も諸子と同様一箇の聖職者である。そこで私の名義において語ることは、あまりにも自分自身のことに關して言いすぎはせぬかと懸念するが故に、あえて匿名としたわけである。しかしながらとにかく、私は口に出して言わねばならない。それは、目下の時局が極めてひどいものであるにもかかわらず、誰一人としてこのことを口に出して言う人がいないからである…

ついでこの匿名子は、教会が直面している数々の危険を述べ、「使徒の継承者」である英国教会の監督（Bishop）たちを助けなければならぬ、と訴えていくのである。そもそも1832年の選挙法改正を獲得した中産階級の考えていたこと

は、宗教上にも「自由主義思想」を適用して、この世の王国を謳歌することになり、結果的に教会、特に英国教会の權威を貶すことであった。そして当時アイルランドの英国教会を国立の地位からひきずり下そうとしていたので、次は英国教会の番だという危機感が英国教会の内部にはあったのである。

ニューマンは宗教上の自由主義（Liberalism）というもつについては次のように考えていた。彼によると、近年、高い知的水準にあったオックスフォードの二、三の学寮において学者や学生の間に傲慢な理性が生じ、本来理性の関与すべからざる領域にまで容喙するようになった。思想の自由そのものは善なのであるが、誤った自由に陥る危険性が生じたのである。人間精神の構造上、思考によって決着がつけられない事柄、たとえば啓示の問題などのような、神の言葉の永遠の權威にもとづいてのみ受容されねばならぬ真理や価値を、自然に内在するものに拠って判断するのが根本的な誤りなのである。このため、理性の承認をえられない宗教的教説を軽くみたり、信じようとしないう18世紀理神論や19世紀の宗教の世俗化にニューマンは強く反対したのである。人間の思考を超えたものが神の存在であり、従って神は人間の目には見えないのである。見えないものを真とするためには、人間は誇らかな知をすてて humility を実践せねばならぬ。「自由主義思想」とは、この人間の判断を超越した天啓の教理を人間の判断に従わせようとする傲慢のもつ誤りなのである。自由主義とは、偽りの思想の自由を謳歌することに外ならない。かくして、Liberalism は教会に対する Anti-Dogmatic な Principle だと定義されたのである。

ニューマンが反対していたこの自由主義を許容する要素を多分に持った国教会内部の一派があった。もともと英国教会の中は高教会、広教会、低教会の三派に分かれていた。この区分は次のようなものであった。

高教会はアングロ・カトリックの立場に通じ、広教会は国教会の中の自由主義陣

### 「オックスフォード運動」の意義

営と、そして低教会は福音派と、それぞれつながっていた。高教会は教理教義において厳格な正統派を自認し、使徒継承こそ教会の基礎であるという信条を掲げていた。この信仰思想を最も知的に表現し、かつ復活させたのが1830年代に起こったオックスフォード運動である。国会内のこの一派は、教会の内外における自由思想を否認し、政治的にはトーリー党一辺倒に傾いていた。

しかし聖職者の大多数は、高教会にも低教会にも信仰の確信がもてなかったために、広教会に踏みとどまった。中道の伝統に則して、この広教会の聖職者たちは、儀式をさほど尊重しない点で高教会派と一線を画し、また個人救済や聖書にさほど力点をおかない点で、低教会派と異なっていた。熱心な広教会聖職者の関心は、社会的良心であった。フレデリック・デニソン・モーリスとチャールズ・キングズリーという二人の広教会派の信者によってキリスト教社会主義運動が始められたのも、この事実をよく物語る。キリスト教社会主義者たちは、成人学校や労働者のための専門学校を創出し、教育の場におけるキリスト教精神の高揚をはかった。この運動は短命ではあった（1848—1854）が、当時における保守的キリスト教に対する強力な批判者としての機能を果たしたのであった。<sup>①</sup>

ここに登場するチャールズ・キングズリーこそが、『マクミランズ・マガジン』誌上で、ニューマンの悪口を言ったがために、はからずも、その後カトリックに改宗してすでに19年経った時点でのニューマンをして、一気呵成に弁明のための自叙伝を書かせる契機を与えることになった人物なのである。こうして出来上がったのが、キングズリー氏に答える形をとった『わが生涯の弁』であり、われわれはここにニューマンの改宗に至るまでの刻明な魂の遍歴の記録をみることができるのである。自己の宗教観の変遷という点に絞られたこの記録は、同時代の T. カーライル、J. S. ミル、C. ダーウィンの自伝とも異なり、また、人気の点では18世紀のボズウェルの『ジョンソン伝』を思わせるものがあるが、



時と場所をはるかに越えて、聖アウグスティヌスの『告白』と比肩する特質をもったものであろう。

『わが生涯の弁』のキングズリー氏への答の部分を除いた構成は、第一章は幼児より1833年に始まった「オックスフォード運動」までの期間におけるニューマンの宗教観の形成期の記録である。第二章は彼の目からみた「オックスフォード運動」の解説である。1833年、『時局に関する小冊子』第1号を発刊して、以来、英国教会の抱いている真理を顕彰し、その教理を擁護し、鋭い論陣を張り、遂に英国教会が拠って立つ39箇条と呼ばれる1562年制定の教義規範に対して、ローマ教会との関係で一つの解釈をほどこしたのが『小冊子』第90号であった。この論文の撤回を求められ、それを拒否したため、主教により廃棄処分を受けるに至った経過が述べられている。ニューマンにとっては、英国教会の拠って立つ「中道」の徹底研究の結果がローマへ通じる道となったのである。第三章はこの事件のあった1839年から41年までの2年間における『小冊子』90号をめぐる問題や、英国教会の立場に立っての、その教理の弁護の記録である。第四章は1941年から、英国教会員としては、いわば死の床にあったとも言えるニューマンが、中道主義の最後の痕跡が払拭されたことにともない、聖マリア教会を辞し、45年10月8日、カトリックの受洗をうけ、すべての友人たちと訣別し、オックスフォード郊外のリトルモアを去っていった1846年2月23日までの記録である。『わが生涯の弁』の白眉というべき章で、読者の感動をさそわずにはおかない記事にあふれているのである。ニューマンの唱道していた、概念によってではなくて、信によってものをrealizeしていく過程が具体化されていった4年間（その前の、疑念を抱きはじめて時からの2年を加算すれば満6年になる）、つまり、これが理念が受肉していった経過の貴重な記録となっているのである。更にニューマンは理論的な最後の詰めとして、1845年のはじめに、『キリスト教教義発展論』を書き出し、10月までにほぼ完成させている。

「オックスフォード運動」の意義

(もっとも自分では未完であるとはいっているが。)キリスト教という啓示宗教の教義の歴史的発展が墮落ではなく、正しい発展であったと説き、ニューマン自身の成熟、信仰の充実の過程と重ね合わせたような記事がみられる。

私は1845年のはじめに『教義発展論』を書きはじめ、10月まで引きつづいてこの仕事に専念していた。仕事が進むにつれて、私が直面していた難点は一掃され、もはや「ローマ・カトリック教徒」と呼ぶのをやめて、大胆に「カトリック教徒」と呼ぶようになった。最後まで書き終わらないうちに私は改宗を決意し、そのためにこの書物は当時のままの未完成の状態にとどまってしまったのである。②

かくして一応「オックスフォード運動」はその幕を下したとされている。クリストファー・ドーソンもその著 *The Spirit of the Oxford Movement* において、1841年の『小冊子』第90号廃棄をもってその終焉とし、R. W. チャーチは、その著 *The Oxford Movement* において、1833年から1845年、すなわちニューマンの改宗時までの12年を扱っている。実際には E. W. ビュージーや J. キーブルなど有力メンバーがまだ残っていて、この運動は更に続けられていったのであるが、主役のいない舞台に対して観客はそっぽをむくのが常である。

一方その後のニューマンは、バーミンガムのオラトリオ会に所属し、1854年から58年にかけてはアイルランドに渡り、新設のダブリン大学の総長をつとめた。『大学の理念』*The Idea of a University* は就任時の講演集で、その理念の卓越さ、分析の鋭どさ、その珠玉のような文体からして、周知のように大学論の古典とされている。わが国でも、大学紛争のはげしかった頃はよくカール・ヤスパースやホセ・オルテガ・イ・ガセットの大学論と共に引き合いに出されたものである。客観的で何ものにも片寄らぬ知識の獲得とそれを目的とした Liberal Education の重要性、知識と他の諸々の分野との関係、文学と科学の

言語のもつ意味の違いや宗教と言語や文体の関係などを説いたこの大学論は、英語文化の金字塔というべきものであろう。ニューマンにあっては、宗教者にして始めて「文は人なり」という言葉が実現できるのである。

すでに前に述べたように『わが生涯の弁』は、キングズリー氏によって触発され書かれたもので、彼のカトリックへの改宗に至った時点までの魂の経過報告であったのであるが、カトリックとしての後半生、そして彼の一生の総決算は、1870年に刊行された『承認の原理』(*The Grammar of Assent*)にみることができる。これこそは彼の主著であり、最終的蒸溜を経た芳醇な甘露なのである。概念的・知的理解と真の理解の決定的相違、つまり、われわれの知っていることから演繹される「承認」ではなく、われわれ一人一人の良心とも言える心の声に導びかれ、ああでもないこうでもないという悪戦苦闘の結果開示されてくる信の世界における「承認」、こういった問題の構造を明確に示してくれるのがこの書物であり、従ってこの書はおのずからニューマンの一生を總括したものとなっている。紙幅の関係でここではこれ以上触れられないのは誠に残念である。

以上ニューマンの生涯を一瞥することで「オックスフォード運動」の枠組をみてきたのであるが、この運動の意義は一体何であったのだろう。

先づ第一に、『小冊子』運動にたずさわった人たちの抱いていた宗教改革の理念の純粹性のために、しかもそれが大きな時代背景をともなった歴史の正面で、且つ英国の文化の中心で行なわれたことから生ずる他への大きな影響力があげられるだろう。これ程までに注目をあつめ議論が沸騰した運動は、ヘンリー八世の英国教会設立以来なかった事件である。1833年に生存していたイギリスの知識人のうち、大きな影響をうけなかった人は一人もいなかったと断言できる程の運動であったのだ。推進者たちの学識の豊かさ、誠実さのために、その影響力には倍音がともなっていた。冒頭に引用したアーノルドの文面にみられ

るように、当時オックスフォードにいた知識人で、何らかの影響をこうむらなかった人はいなかったのである。ヴィクトリア朝文芸史に名を連ねる人士はここにすべて列挙されるであろう。すでに述べたように、この運動の発端の基底には「感情の要請」の声があったのであるから、この運動には、先行したロマン主義運動の継続の要素もあった。この運動はヴィクトリア朝の即物主義、科学主義、俗物志向への対極となり、アーノルド、ラスキン、モリス、ペーターを生み、ゴシック・リバイバル運動と連動して建築・絵画・彫刻・音楽・装飾など各方面に反響していった。また、この運動のもっていた内面重視の影響として、教育界の改革、宗教的目的をもった施設や組合、例えば「聖オルバン協会」等の協会を発足させることになったし、アングロ・カトリックの伝統を見直す機会となったことなども言をまたないことであろう。

しかしながら、この運動の最大の推進者であり、学識豊かで人間性に対する深い洞察力を持ち、倫理的、社会的に一点の非の打ちどころのなかったニューマンが、英国教会の教理の原点を極めて慎重に時間をかけて探るうちに(ニューマンの場合には、これこそ自分の信仰の確証をうるための唯一の方法であった)、この道がローマに通じるものであることが確証されてついに改宗せざるを得なくなった、ということのもつ意味ほど大きな問題はないのである。政治と宗教とが一体である英国教会というものの構造を考えれば、このことは政体を否定する革命なのである。そうして、それを行なった人物が生粋のイギリス人で英国教会の模範生であったという事実は、英国上流階級あるいは知識階級の人びとの心胆を寒からしめ、あるいはいきり立たせるという結果を招いたのである。ルネッサンス以降のイギリス文明、ひいては西欧近代文明にとっての、最大の挫折感がここに起こったのである。近代化、あるいは現代化の過程が具体的に始まったといってもよいヴィクトリア朝の出発点にこの事実があったということが、改めて認識されなければならぬであろう。「オックスフォード運動」

が現代の原点であるという事実は、この運動が挫折した後のヴィクトリア朝の問題含みの多種多様な産物をみれば充分納得のいくことであろう。

注

- 1) J. P. ブラウン (松村昌家訳) 『19世紀イギリスの小説と社会事情』(英宝社、1962年) 77—78頁。
- 2) J. H. ニューマン (川田周雄抄訳) 『現代キリスト教思想叢書』 3巻 (白水社、1973年) 199頁。

おわりに

「オックスフォード運動」の意義とその影響について——というプロジェクトの下にわれわれ5名の研究員は5つの分野で研究を行ってきた。中心人物ニューマンを多田が、もう一人の推進者キーブルとイギリス文学の流れを内藤が、カトリックの伝統に連なる作家研究を鈴木が、ゴシック・リバイバルの線に連なるラスキンを佐々木が、そして「オックスフォード運動」の精神の影響はうけたがニューマンとは別の流れをつくり出し、時代に警鐘を発したアーノルドを村瀬が担当した。もちろん、これまで行ってきたこれらの研究は、この大きな運動のはんの一端を解明しただけのものにすぎない。それ程に大きく且つ重要な意味を持っているのがこの運動であったのだ。これからも時間をかけて研究が続けられねばなるまい。ただ、この紀要においては、規定の研究時間において得られた成果、あるいはこれからの研究の方向性にすぎないかもしれぬが、それらを報告させていただいたのである。最後に、このプロジェクトを組むことができて、研究図書や資料購入の予算を与えて下さった大谷大学真宗総合研究所長並びに関係の方々には心からの感謝を申し上げたい。

(研究代表者 多田 稔)